

と同時に、本作の類まれなストーリーに、深みと人間味を与えていく。それにしても、1900＝ナインティーン・ハンドレッドというピアニストの名前は、奇妙。一体誰がこんなケッタイな名前をつけたの？

ちなみに、「タイタニック号」がイギリスを出発してニューヨークに向かった処女航海は1912年4月12日だったが、イギリスとアメリカを結ぶヴァージニアン号が大西洋を往復していたのは19世紀末。そして、その船内に男の子が置き去りにされたのは1900年のことだ。しかし、いくらなんでも、それをそのまま名前にするのは乱暴すぎる。大切な子供に、そんな雑な名前をつけたのは一体誰？そんな親の顔を一度見てみたいものだが・・・。

■□■原作は？脚本は？音楽は？イタリア完全版とは？■□■

本作の監督・脚本は、イタリア人のジュゼッペ・トルナトーレ。あの有名な『ニュー・シネマ・パラダイス』(89年)の監督だ。そして音楽は、マカロニ・ウェスタンで世界的に有名になり、去る2020年7月6日に亡くなったエンニオ・モリコーネだ。また、誰も想像できない“現代の寓話”ともいべき本作の原作になったのは、アレッサンドロ・バリッコの独白劇『海の上のピアニスト』だが、原作と脚本との境目は、パンフレットには何も書かれていない。

他方、興味深いのは、私が今回劇場ではじめて観たイタリア完全版である170分の本作は、1999年の公開から約20年の時代を経て、今回初めて日本で公開されたものということ。逆に言えば、これまで日本で公開されていたのは、125分のインターナショナル版(＝縮小版)だったということだ。約45分もカットされていたわけだが、各シーンから少しずつ削られていたため、トータルの物語が大きく変わることはなかったようだ。しかし、少年時代のナインティーン・ハンドレッドと船で働く移民たちとの交流のシーンや、豪華客船での思い出を語るマックスのパートはインターナショナル版ではカットされていたそうだから、イタリアでしか公開されていなかった完全版を見たいという要望が日本で強かったのは当然。それが今回、やっとイタリア完全版(HDリマスター)として、日本で公開されたことに感謝！こりゃ必見！

■□■監督の術中にはまってしまふ導入部、その1 ■□■

『タイタニック』(97年)は、しわだらけの老女の独白からスタートして、本格的ストーリーへと発展していった。また、『アマデウス』(84年)も、不世出の天才音楽家・モーツァルトへの嫉妬と苦悩に苛まれる年老いた音楽家サリエリの独白からスタートし、本格的な物語へと発展していった。それと同じように、トルナトーレ監督の『ニュー・シネマ・パラダイス』も、イタリアのローマで映画監督として活躍するサルヴァトーレ・ディ・ヴィータ(ジャック・ペラン)のもとへ、一人の男がこの世を去ったとの知らせが届くところからスタートし、そこで彼の頭の中に蘇ってきた30年前に捨てた故郷の村と、忘れえぬ男との思い出に物語が発展していった。

本作の導入部では2つのストーリーが提示されるが、その2つの導入部のストーリーで、観客は完全にトルナトーレ監督の術中にはまってしまうはずだ。その第1は、大切なトランペットを楽器店に売るためにやってきたマックスの物語。本人にとっては演奏用に使われ、思い出の詰まった大切なトランペットでも、中古品として処分すれば、わずかの金額にしかならないのは当然。それでも、「そんな金なら、売るのをやめた」とは言えないのが辛いところだ。渋々提示額で承諾したマックスが、店を出ていく時に見せた唯一の抵抗は、「最後の思い出にもう一度吹かせてくれ」というもの。「もう閉店だ」と言いつつ、それを受け入れた店主（ピーター・ヴォーン）は人情派だが、マックスが吹く曲を聴いた店主はビックリ。さらにビックリしたのは、そこで店主が取り出してかけた1枚のレコードから流れる曲を聴いたマックス。それは、マックスが吹いた曲と同じピアノの曲だったが、なぜそんなレコードがここに？そして、店主はその曲名と演奏しているピアニストの名前を教えてくれとマックスに迫ったが、それに対するマックスの答えは・・・？

■□■監督の術中にはまってしまう導入部、その2■□■

愛媛県松山市生まれの私は1967年に大阪大学に進学したが、大学時代の松山一大阪間の移動はもっぱら関西汽船だった。コロナ騒動下の今では、2等船室に大勢の客を詰め込んで雑魚寝させる格安コースはなくなっているそうだが、学生時代の私の船便はもっぱらそれだった。他方、「タイタニック号」は1912年4月10日、イギリス・サウサンプトン港から、ニューヨーク行きの処女航海に出発したが、そこでも、ローザのような1等客室の客は豪華な個室だが、ジャックのような3等客室の客は雑魚寝だった。豪華とはいえ、ヴァージニアン号も3等の客室はそれと同じだ。その船のボイラー室で働く最下等の船員たちの待遇が最悪だったのも当然だ。

本作のすばらしい導入部その2は、世界中の人々がやって来ては去っていくその船内で、黒人機関員のダニー・ブードマン（ビル・ナン）が、小さなレモン箱に置き去りにされた生後間もない赤ん坊を見つけ、それを育てるストーリー。ヴァージニアン号の機関室で働くのは男ばかりだから、生まれたばかりの子供のお乳は？おしめの交換は？さらに、彼の出生届は？学校は？保険は？犬の子を育てるのではなく、育てるのが人間の子供となれば、諸々の手続きが大変。まず最初に、子供の名前は？

ちなみに、『ロビンソン・クルーソー』では、ずっと孤独な漂流生活を続けてきたクルーソーは、無人島で助け出した捕虜をフライデーと名付けたが、それは彼を見つけたのが金曜日だったからという、きわめて安易な理由。ダニーに対しては、それと同じような提案も出されたが、ダニーは自分の想像力を駆使した挙句、その赤ん坊を1900＝ナインティーン・ハンドレッドと名付けることに。

それから二十数年が過ぎた今、三等船室のロビーで楽しそうにピアノを弾いている男がいた。彼こそ成長した1900だが、なぜ、あの赤ん坊が今、こんなに自由自在にピアノを弾いているの？ひょっとして、この男が「海の上のピアニスト」なの？

■□■曲はすべて即興！そのインスピレーションの源は？■□■

『アマデウス』を観ていると、曲をひねり出すのに苦労するサリエリに対し、モーツァルトはいつでもどこからでも曲が溢れ出ていたから、サリエリがその才能に嫉妬したのは当然。モーツァルトにとって、作曲とは頭の中で溢れ続けるメロディを五線譜に書き写すだけの作業だった。それに対して、「海の上のピアニスト」こと1900が弾く曲は、すべてオリジナル、と言うよりも、即興曲。つまり、今自分の目に触れる乗客の表情や立ち居振る舞いから得たインスピレーションを自分の中でメロディにし、それを誰も聴いたことのない情緒あふれる音色で、即興で奏でていくものだったから、すごい。そう言われてもそれが具体的にどのようなものかを想像するのは難しいが、本作後半には、甲板に佇む一人の美しい娘（メラニー・ティエリー）に目を奪われる1900の姿を通して、彼流の即興曲の作り方、弾き方がわかりやすく演出されるので、それに注目！

なお、1900がそんな曲を作り上げるについては、彼の観察力の鋭さと、正確さにも注目したい。あの客の出身地は？彼女が悲しい顔をしている理由は？あの2人の夫婦仲は？そんなことが1900の観察眼を通せばすべてわかるうえ、それがすべて和音となりメロディとなり、完成したピアノ即興曲として演奏されていくわけだ。ちなみに、少女と出会った時に弾かれた即興曲は『愛を奏でて』という曲だが、あなたはこの曲を聴けば、あの美しい娘の姿を思い浮かべることができる？

■□■ピアノの頂上対決に注目！その迫力は？勝者は？■□■

本作ではまず、誰にもピアノの弾き方を教わっていない子供時代の1900が、1人ピアノの前に座って美しいオリジナル曲を自由自在に演奏している姿にビックリさせられる。続いて、多くのダンス客を前に、「今日はふつうに！」と念を押すバンドの指揮者に対して「了解」と言いながら、すぐに自由奔放な1900流の演奏に移行し、すべてのダンス客を引きずり込んでいく1900の技量に驚かされる。

1900自身は「海の上のピアニスト」として生きていくことにこだわっていたから、マックスがいくら世界公演を進めてもそれに応じなかったが、そんな1900の名前を聞きつけてピアノの頂上対決を挑んできたのが、ジャズの創始者と呼ばれている男ジェリー・ロール・モートン（クラレンス・ウィリアムズ三世）だ。勝負には無頓着な1900は、当初は無邪気にジェリーの演奏に涙したり、ジェリーの曲を真似たりしていたが、最後に一心不乱に弾く曲を聴いていると・・・？ジェリーはもともと相当なエンターテイナーだが、その面では1900も相当なもの。ジェリーのタバコを借用した演出を見ているとそれがはっきりわかるが、1900がここで見るピアノ演奏のものすごさは、あなた自身の目でしっかりと！アントニオ猪木が生涯継続した「異種格闘技戦」は長い間プロレス界を牽引してきたが、ピアノ界における異種格闘技戦とも言える、1900VSジェリーの頂上対決は必見（必聴）だ。

■□■遂に船から降りる決断を！その理由は？■□■

1900が一生「海の上のピアニスト」として過ごすつもりだったことは、ストーリーの展開上明らかだ。しかし、本作後半、少女と巡り合った1900は突如船を降りる決心をするので、それに注目！従前から陸に上がっての演奏旅行や結婚生活を1900に勤めていたマックスが、それを喜んだのは当然。そして、その理由を少女との出会いに求めたのも当然だが、それは一つのきっかけではあっても、すべてではなかったらしい。つまり、1900が船を降りる決心をした理由は何と「陸から海を見てみたい」ということだったから、マックスがそりゃ一体ナニ？と思ったのは当然。しかし、1900の説明を聞いてみると、なるほど、なるほど・・・。

ところが、遂にその日が到来し、1900はタラップの途中まで下りたが、はじめて目にした果てしなく続く都会の街並みに、呆然と立ち尽くしてしまうことに・・・。

■□■船の寿命は？ピアニストの選択は？■□■

簿記の勉強を始めると、最初に借方（左）、貸方（右）や、資産、負債資本、費用、経費等の概念を叩き込むことが必要だ。経費の中で少し難しいのが減価償却だが、ヴァージニアン号のような豪華客船の減価償却はどうなるの？それは定額法？それとも定率法？また、減価償却期間は何年？ちなみに、人の寿命は、織田信長の時代は50年だったが、1900年当時はもう少し伸びているはずだ。そんなことを考えている（？）と、本作ラストには寿命が尽きたヴァージニアン号を爆破によって廃棄処分にするストーリーと、その中にこもっているはずの1900をダニーが探し出そうとするストーリーになっているので、それに注目！

9月13日に観た『ミッドウェイ』（19年）では、最後まで米空母部隊と戦い、遂に沈没の時期を迎えた空母「飛龍」の山口多聞艦長が艦と運命を共にする姿が描かれていたが、それは艦長なればこそその行動。いくら「海の上のピアニスト」として、生まれてからずっとヴァージニアン号の中で過ごしたとはいえ、1900がヴァージニアン号と運命を共にする義務がないのは当然だ。もっとも、本作では1900の曲作りのノウハウは説得力を持って描かれているが、この時期の1900の心理描写はそれほどハッキリ描かれていない。唯一無二の親友であるマックスでさえ、1900の気持ちはわかっていないようだ。しかし、マックスがレコードと蓄音機を持って船内に入り、あの『愛を奏でて』を流すと、そこに現れたのは・・・？

本作は、サリエリのさまざまな回想の中で自由奔放に生きるモーツァルトが登場してきた『アマデウス』と同じような演出で、マックスがストーリーの“語り部”になっているが、彼の演技はサリエリと同じように素晴らしい。ヴァージニアン号の船内で1900と再会できたマックスは、「一緒に船を降りよう」と説得したが、さあ、1900の最後の選択は？落語では最後のオチが大事だが、名作映画でもそれがピシッと決まっているのが当然。しかして、本作ラストは「生涯一度も船を降りなかったピアニストの物語」を、楽器

屋の店主に対して語り終えたマックスが静かに店を出ていくシーンになるが、そこに登場する心温まるエピソードとは？それもあなた自身の目でしっかり見て、本作全体の素晴らしさを再確認したい。

2020（令和2）年9月18日記